

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00841

研究課題名(和文) 実践英語教育教材開発 - 通訳・翻訳トレーニング技法を用いて-

研究課題名(英文) Development of Learning Material for Practical English Education

研究代表者

長尾 ひろみ (Nagao, Hiromi)

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・客員教授

研究者番号：70289049

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人が、何故、長期間英語を教わっても効率良く実用化できないのかを探究し、新たな英語習得手法として、通訳・翻訳トレーニング技術を用いた英語習得教材を開発する。研究した結果、幼少期の読書量の多い学生とそうでない学生では、英語習得効率が異なることが判明した。それは、文章を読んだ時点で、内容をイメージ化できるかどうかの差が出た。結論としては、英語を効率よく習得する為には、母語である日本語の分析、イメージ化の訓練も必要である。つまり言語運用能力の向上である。同時通訳の訓練法は、瞬発力、耐久力、集中力、思考力、体力など、効率よく積極的に語学を習得するために必要な「力」をえる事が出来る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、効率の良い効果的英語習得法は、英語を勉強するだけでなく、母語である日本語の力を並行してつける事であると結論付けた。幼少期に絵本の読み聞かせをしてもらったり、自分で自由に読書をする経験が、英語の習得におおいにつながる事が分かった。新井紀子氏の『教科書が読めない子どもたち』(東洋経済store)に共通する現象で、今の学生たちは、英語の学習の以前に日本語の理解力に大いに問題が見受けられる。本研究成果として作成する教材は、今まで教材として捉えられていなかった日本語力(母語)と英語力の相関性を絡めた教材となる。これは、今後の英語教育に大いに役立つものとなる事を信じている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to find out why Japanese students cannot acquire English language quickly although they have studied it for a long period of time. The main reason revealed was that students did not have enough experiences of read books positively. The new method of learning English will be introduced as a textbook: utilizing "Training Method of Interpreting and Translating". In order to do interpreting whether it would be simultaneous or consecutive, you need to have information and knowledge of the theme of the speech you will be interpreting and must be well prepared. At the same time, you need to be able to imagine as a picture the stage or situation which the speaker is trying to describe in words. Whether interpreting or translating, you need to convert the meaning from original language to the target language. This process not only improves the language proficiency but also accelerates the speed of understanding of the context of the speech.

研究分野：言語習得

キーワード：英語習得法 同時通訳トレーニング法 日本語力と英語力の相関性 日本語の読書と英語力

### 1. 研究開始当初の背景

日本における英語教育において、教育効果が上がっていないことは周知の事実である。高等教育機関を修了しても、英語運用能力は高いとはいえない。同時に、グローバル化において、国際バカロレア教育（TOK/Theory of knowledge）の推進を迫られている。

この「問い」の「解」こそ、初等・中等教育・高等教育のあらゆる段階において、海外への留学、海外の学生との交流に対して知識に基づいた英語力を身につけることである。そのためのCLILの手法を取り入れた教材開発を行う。教科学習と語学学習を統合した教育法（Content and Language Integrated Learning）であるCLILは、「内容言語統合型学習」「教科学習と外国語の組み合わせ」の意味である。母語で学習していた科目・内容を、外国語学習の適切な支援を受けつつ外国語を手段として学ぶことで、科目・内容と外国語を同時に習得することである。CLILで学んだ両言語での内容を応用編として、同時通訳トレーニング法を用いて、変換し、定着させる。同時通訳が論理的思考による言語変換であり、CLILで鍛えた手法をもって論理的アウトプットできる能力を育成することになる。

まさにこれが、教室内でのアクティブ・ラーニングである。学んだ知識を日本語と英語の双方向への理論的思考に基づいた言語変換を身につけるために同時通訳・翻訳を融合するため、同時通訳機器などのICTを利用したアクティブ・ラーニングを高等教育以前で実践し、効果的な教授法研究ならびにテキストならびに教材開発を試みたいと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語を母語とする学習者の教育において、日本語と英語の教育を融合する手法としての「通訳・翻訳トレーニング技法」を開発することである。開発された「通訳・翻訳トレーニング技法」により、言語運用能力向上プログラムの改編ならびに初等・中等教育のカリキュラム改変を促し、日本における英語教育のモデルを創ることも可能となる。

本研究は、「従来の学習者は、第二言語（英語）を学ぶ以前に、その基盤となる第一言語（日本語）の運用能力が十分ではない。ゆえに、英語のみを教えても伸び悩む」という仮説を立てた。逆に言うと、「学習者は、豊富な知識を母語である日本語での内容理解を高めると同時に、第二言語を用いて論理的構築整理（TOK）をすることで、英語を多角的に運用することができる」ということになる。この点は、日本語を母語とする学習者の教育において、最も効果的な英語教育の開始時期を示唆する見解ともなる。

### 3. 研究の方法

これまで日本は、中高6年間で英語を義務教科としてきた。また、大学の初年次教育（教養教育）として2年間必修科目として取り入れてきた。しかしながら、結果としては、日本での英語教育は、グローバルにコミュニケーションが取れ、議論ができる、あるいは社会に出てビジネスに通じる英語力を身に付ける人材を生み出すことができなかった。では、何が問題なのであるのかといった議論は今も続く。

英語学習のみがグローバル化に繋がることではないと本研究者一同考えているが、学習者の英語運用能力の向上がみられないことは、学習者自身の知識を論理的思考で並べ替えることができず、言語力（英語・日本語）で表現できない。さらには、自己効力感を充たすことはなく、自己表現能力の限界を自身で導き、負のスパイラルに陥ることを意味する。また、英語あるいは日本語のみで学ぶため、その論理的運動もない。少なくとも、これが一因となり、日本語を母語とする若者の海外への挑戦が減少しており、グローバル人材の育成に繋がらないと考えられる。

本研究は、「従来の学習者は、第二言語（英語）を学ぶ以前に、その基盤となる第一言語（日本語）の運用能力が十分ではない。ゆえに、英語のみを教えても伸び悩む」という仮説を立てた。逆に言うと、「学習者は、豊富な知識を母語である日本語での内容理解を高めると同時に、第二言語を用いて論理的構築整理（TOK）をすることで、英語を多角的に運用することができる」ということになる。初等・中等教育の日本語を母語とする学習者の教育において、日本語と英語の教育を融合する手法としての「通訳・翻訳トレーニング技法」を開発することは、日本における英語教育のモデルを創ることも可能となる。学んだ知識を日本語と英語の双方向への理論的思考に基づいた言語変換を身につけるために同時通訳・翻訳を融合するため、同時通訳機器などのICTを利用したアクティブ・ラーニングを提案し、日本語と英語の教育を融合する手法を用いたいと考えた。これを「通訳・翻訳トレーニング技法」とする。つまり、学習者が「通訳・翻訳トレーニング技法」で学習することにより「考える力」を養成し、思考する人材を育成すること、

この2点を切に希望し、本研究の着想に至ったわけである。この点は、日本語を母語とする学習者の教育において、最も効果的な英語教育の開始時期を示唆する見解ともなる。

そのためには、高等学校の新学習指導要領(英語)の改訂にあるように、「学力の三要素」(「基本的な知識及び技能」、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現その他の能力」、「主体的に学習に取り組む態度」)を出発点に、育成する「資質・能力」を「三つの柱」(1.生きて働く知識・技能の習得 2.未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成 3.学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養)として整理し、具体化することが必要である。したがって、インプット・アウトプット・プレゼンテーション(通訳)、リーダー・ライティング(翻訳)といった従来とは異なる深みのある教授法を開発すべきである。すなわち、通訳・翻訳トレーニング技法を用いると同時に、国際バカロレア教育(TOK)を醸成するため、まずは、中等教育のテキストならびに教材開発が必要である。このことによって、高等教育機関における英語教育も大きな変化を遂げると確信する。開発された「通訳・翻訳トレーニング技法」により、言語運用能力向上プログラムの改編ならびに初等・中等教育のカリキュラム改変を促し、日本における英語教育のモデルを創ることも可能となる。

ここまでのことをコロナ禍以前に仮説として、実証する予定であった。しかしながら、2019年あたりから発生したコロナ禍による教育機関への影響は大きく、不慣れなICT利用において、初等中等の教育現場は混乱を来し、本研究への協力が可能となる状況ではなくなってきた。研究開始当時は、研究代表者が学事顧問をしている学校法人共愛学園の中高生を被験者とするつもりであったが、全てオンライン授業となり、データを取れない状況が3年続いた。そのため、本研究を遂行し、新教材を作成するに当たり、日本語と英語の能力の相関性を測る必要性から、人数は少ないが、研究代表者が運営している瀬戸内グローバルアカデミーの学生を被験者としてデータを取ることにした。

本研究の目的は、日本語を母語とする学習者の教育において、日本語と英語の教育を融合する手法としての「通訳・翻訳トレーニング技法」を開発することであることには変わらない。したがって、被験者の年齢は、当初の予定より高いものであるが、英語を学ぶ意思には変わらない。また、学ぶ以前の英語のレベルも高いとはいえなかったが、いずれもアメリカの大学への正規留学を希望していた学生ばかりである。つまり、通訳する内容を高度化することによって、知識(knowledge)習得のため「読む」「書く」を融合することを取り入れたテキストならびに教材開発を実施することも可能となる。4技能と呼ばれるもののうち「聞く」「話す」と「読む」「書く」を分離した「聞く」「話す」を用いる訓練法が一般的通訳トレーニング技法である。これに対して、言語運用能力向上プログラムとしての「通訳・翻訳トレーニング技法」は、記憶力・集中力・分析力・即対応力・応用力等が要求される学習手法であり、母語知識に基づいた内容を4技能(「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと(やり取り)」、「話すこと(発表)」、「書くこと」)の五つの領域を基にトレーニングする。

教材としては、難易度の高いものを選んだ。レイチェル・ルイーズ・カーソン(Rachel Louise Carson、1907年5月27日-1964年4月14日)の“Silent Spring”(『沈黙の春』)であり、単に英訳するのではなく、その背景にある環境保護の観点においての各問題点への理解を深めることに集約した。また、各問題点に近いフィールドワークの内容を日本語でまとめたレポートの作成を課題とし、理解力の強化を図った。

#### 4. 研究成果

以下の3点が理解され、今後の研究に活かされると考えている。

##### 1)「文法の棚下し」の必要性

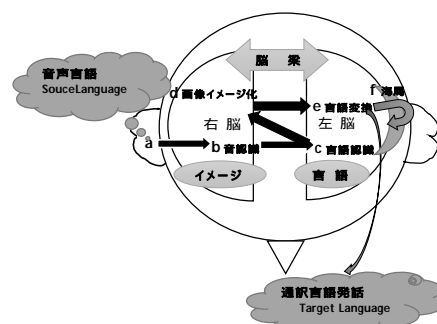
四技能の学習優先順位があり、必ずしも四つへ並行して力を付けることを考えなくても良いと考える。今までに断片的に学んだ英文法を総ざらいすること、いわば「文法の棚下し」から始めることが重要であり、そのためのテキストが必要である。

##### 2)「通訳・翻訳トレーニング技法」による学習イメージの構築の可能性

a 音として認識した音声言語(Source Language)を耳から取り入れ、b 右脳はそれを音イメージとして認識する。左脳に移動し、c 語として認識する。さらに、d 画像イメージ化し、右脳に移す。次に、e 言語変換のため左脳へ移動する。f 記憶のファイル棚である海馬より適切な等意語を抽出、言語変換する。それをg 通訳言語(Target Language)として発話する。これを繰

り返すことにより、脳梁（筋肉）が通訳する人とししない人を比較した場合、通訳する人は太くなっている。これは、Barbara Moser Moses の説であるが、学習者はこのような形で言語変換していると考えられる。つまり、学習者が「通訳・翻訳トレーニング技法」で学習することにより「考える力」を養成し、思考する人材を育成すること、につながると考えられる。

今後は、医療関係者と協議し、立証していく必要性を痛感している。



### 3) 母語による読書量の差による認識の異なり

学習者の理解度を確認していく中で、幼少期の読書量の差が認識力、理解力へ影響していると考えられた。今回学習者（被験者）の母語は日本語であったが、日本語の表現力においても差異が現れている。彼らの読書量と日本語能力の相関を数値では立証できないが、単に読書量の差だけではなく、保護者による読み聞かせなども一つの因子として影響しているといえよう。さらには、社会経験の有無なども新たな因子として考えられることから、今後の研究課題となる。

### 4) 母語としての日本語の分析、明確なイメージ化の訓練

上記3)とも関連し、英語力と日本語力との相関にもつながる。日本語の構造を理解し、文のねじれを防ぐことが大切である。そのためには、以下の3点を特に強調したい。

主語と述語の関係をつくり、エッセイ以外では体言止めを使用せず、主張を明らかにする。

短文にし、文章を構成する。文章を書く際には、段落をつくる。

話しことばと書きことばの区別を明確にする。

また、最も要なのは、書き手、話し手が読み手、聞き手の存在を意識することである。つまり、独りよがり、思いやりのない記載や発話はコミュニケーションの前提を壊すことになるだけでなく、人間関係において相手を尊重する意思を持っているかどうかにかかわるということをまず理解することである。

### 5) 新たな力、retention（リテンション）を養う必要性

理解力、集中力と持続性、集中力も瞬発力など、さまざまな能力の必要性を問われるが、前に述べられた内容を記憶の中に保存する力（retention）も必要となる。これを養い、理解し、それを言語変換してアウトプットしなければならない。

### 6) 同時通訳機器の活用

retention（リテンション）の訓練 集中力と持続性の訓練 同時通訳の訓練 に用いることができ、スピード感、集中力と頭に情報を蓄積するという作業の訓練において有効である。

以上の成果の報告に関しては、報告書を発行し、瀬戸内グローバルアカデミーのホームページ（<https://sga.aust.jp>）でも公開予定である。今後の研究継続のためのプラットフォームとする予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石井 三恵  (Ishii Mie)  (50280178)	摂南大学・教育イノベーションセンター・教授    (34428)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関